



詩／なかまたち いま、ナニしてる？ くどうなおこ 2  
 わたしが読んだ童心社の本⑥／増田喜昭 3  
 松谷みよ子・民話紙芝居の世界／水谷章三 4-5  
 紙芝居の灯をつなぐ／築野友衣子 6  
 なかやみわさんインタビュー 7

イラスト／田島征彦

## 母との時間、家族との時間

細谷亮太

2017年7月18日、聖路加国際病院名誉院長の日野原重明先生がご自宅で亡くなられた。満105歳だった。私は小児科医なので付き合う年齢にひどい片寄りがある。現在、我が国の100歳以上の人口は6.8万人にも及ぶらしいが、私の身近で100歳を超えて生きて見せてくれたのは、日野原先生が最初の方だった。

厚生労働省が国勢調査を基に生命表というのを作って、発表しているのをご存じだろうか。ある期間における死亡状況が今後変化しない、つまり核戦争やペスト等、致死の感染症の世界的大流行などが無いと仮定して、各年齢の者が1年以内に死亡する確率、平均してあと何年生きられるかという期待値を死亡率、平均余命などの指標で表したものである。この中で0歳の平均余命は、「平均寿命」と呼ばれその国の医療、保健、福祉の水準を示すとされる。

2017年の春に発表された我が国の平均寿命は、男81歳、女87歳である。因みに、私達、団塊の世代の生まれた昭和22年当時のそれは、男50歳、女54歳だった。団塊の世代は現在70歳。その平均余命は男が約16年、女は20年である。平均的に天寿を全うすれば、私も90歳近くまでは生き続けることになる。現在の子供達が暮らしている環境が、20年後、100年後はどのようなだろうかをイメージするのはなかなか難しい。地球の温暖化、放射性物質や有害な化学物質による地球汚染も止まらない。AIの発達は喜ばしい反面、人と人とのコミュニケーションが乾き過ぎないだろうか等、心配は尽きない。

105年生きた日野原先生が100歳を超えてから私に嬉しそうに話してくれた事で記憶に強く残っているのは、小学生の頃に毎朝、お姉さんの三つ編みのおさげを編んであげたこと。「私は誰よりも上手だったんですよ」と得意そうだった。70年生きた私の場合、楽しく覚えているのは、すぐ下の妹と台所で料理する母にまわりついて遊んだこと。母のスカートのお尻が私の顔の位置だったから、4、5歳のころだったのだろう。

家族との親密な時間が楽しい思い出として多くの人の人生の中で輝き続ける、そんな人間の暮らしが永く続くことを念じてやまない。

(ほそや りょうた／小児科医)

葉のかげから呼びかけるのは

やや だれかと思っいたらピーマンじゃん

はりきって「きいてきて」と いばる

…… ピーマンは内側の「からっぽ」を

「偉大なる空洞」と呼ぶ

そしてカッコいい「無」を生む

はっはっは どの世界にも格言があるのね

きょうコーヒーカップは無口だ

悩んでいるのだ という

「どんなこと？」

……「どうしてキミはヒトで

ぼくはコーヒーカップなのかな」とかさ

ほほう 彼が「てつがくてき」になるときは

たいてい 赤いグラスのことを想っているのだ

いま せかいじゅうで

花は かおりを だいている

小鳥は うたを だいている

綿雲は ゆめを だいている

ひとは

そんな みんなを だいて

生きている

## なかまたち いま、ナニしてる？



く  
ど  
う  
な  
お  
こ

工藤直子／詩人、童話作家。

詩集『てつがくのライオン』で日本児童文学者協会新人賞。

『ともだちは海のにおい』で産経児童出版文化賞。

「のはらうた」シリーズは、多くの子どもたちに愛されるロングセラー。

絵 | 谷口広樹

創業60年記念  
わたしが読んだ童心社の本 6

絵本を読む

想像力

増田喜昭

ますだ よしあき／子どもの本専門店「メリーゴランド」店主。著書に『子どもの本屋 全力投球』『子どもの本屋はメリー・メリーゴランド』（共に晶文社）『子どものスイッチ』（共著、雲母書房）など。



内田麟太郎／文 西村繁男／絵

おきやくがのります ぞろぞろ ぞろぞろ  
がたごと がたごと  
がたごと がたごと  
がたごと がたごと  
おきやくがのります ぞろぞろ ぞろぞろ

ページをめくる。お客が乗ってくる。がたごと、がたごと、列車は街をぬけ、橋を渡り、トンネルくぐり、山を越える。駅に着く。お客が降りる。また新しい客が乗ってくる。がたごと、がたごと、ひたすら列車は走る。

とまあ、それが三度繰り返される絵本なのだが、この「がたごと」と「ぞろぞろ」の絵に、たっぷりしっかが隠されているのだ。

しっかりと、乗客ひとりひとりの特徴を憶えておかないと、最初の「おくやま駅」に着いたときに後悔することになる。

乗客がみーんな動物に変身しているのだ。「あれっ、このリュックの馬の人、あのおじさんじゃない？」「へえー、アロハのおじさん、熊なんだ」「けん玉の子ども、犬になってるぞ」……てな具合に、先へ進むところが、乗り込んだページにもどって、誰がどんな服装していたか、どんなカバン持ってたか、顔は……と、もう一度確認しなくてはいけない。確認というよりも、発見かな。何度見返しても、そのたびに新しい発見があって、みつけると、嬉しくて、つい誰かに報告したくなるのだ。

だから、子ども達とワイワイこの絵本であそぶの

は楽しい。もちろん、彼等のほうが、発見が早い。「あ、このおじさん、みやげ物屋さんの袋持ってるよ」などと、二十ページも前の、プラットホームのおみやげ屋の紙袋の山の模様を憶えていたのだ。くやしくなって僕も探すのだけど、僕はもう、彼氏と別れるのがつらくて、涙を流すおさげ髪の女の子が気になってしょうがない。

「これだよ、ほら、ろくろっ首になってるよー」見れば、女の子と同じ柄の着物を着ているではないかなるほど、涙がボツンと描かれている。

という具合だ。僕たちは、乗客ひとりひとりのドラマを語り、なかなか先へ進まない。なんといっても、ろくろっ首になった駅は、まだかたつめの駅で、乗客みんながおぼけになっているのだ。

がたごと、がたごとの風景は、どんどん過激さを増してゆく。川の水は真っ赤になり、はす池の鯉は飛びはね、雷がとどろく。やがて、橋のたもとで帽子に着物のおじさんが釣りをしている。「あら、明治時代？」と思えば、富士の山、浮世絵の東海道。着いたところは、チャンバラ驛。サムライ、忍者、お姫様と盛りだくさん。

飽きることがない。絵を眺めるというのは、ほんとは想像力だ。絵の細部に、いろんなしっかを見つけてるのは楽しいのだけれど、絵に描かれていないところまで、勝手に物語を作って、それを楽しむのは読み手たちだ。子どもは、その達人だ。一緒に読むと発見がある。だから、絵本作家たちはその達人たちに、いつも挑戦している。

童心社創業六十年を記念して刊行された「松谷みよ子かみしばい 民話傑作選」。松谷脚本の民話紙芝居から(五点(計六巻)を厳選、うち四点には現代作家の絵により、新たな命が吹き込まれました。

水谷章三さんにお話を伺いました。

「私は幼稚なんです」

「(略)母性の文学だとかいわれるんですけど、私があんまり母性的というより、自分が子どもなんですよね。たろうと思っんです。つまり未発達なんです。その未発達の部分があるからしゃあしゃあと書けるんで……。 (略) いまだに猫のしっぽを引っばるとか、つまり幼稚なんです」

松谷さんは、そういって自分を笑いました。『日本児童文学』一九七七年九月号・斎藤隆介氏との誌上対談

民話の語り手を訪ねて、何度か松谷さんの旅について行ったことがあります。松谷さんは、「聴き」の名手です。あの話は、この話は、と、ほしい話だけを、根掘り葉掘り採集する。そのような聴き方をする松谷さんではありません。語り手のはず、に坐って、来し方の人生を、こども語り合いながら始まるのです。

# 松谷みよ子・民話紙芝居の世界

みずたにしょうぞう/児童文学作家。「日本民話の会」会員として、各地で民話の採集・再話を行う。五山賞を受賞した『ふうたのはなまつり』『てつたいねこ』をはじめ、『あかちゃんとおするばん』『馬になったむすこ』など、紙芝居の脚本を多数手がける。水谷章三



『天人のよめさま』 梅田俊作/絵 12場面



『ばけくらべ』 和歌山静子/絵 12場面



『やまんばのしき』 松成真理子/絵 12場面



『さるとかに』 西巻茅子/絵 16場面



『まえかみたらう』(前編・後編) スズキコージ/絵 各12場面



『まえかみたらう』(前編・後編) スズキコージ/絵 各12場面

## 童心社創業60周年記念出版 松谷みよ子かみしばい 民話傑作選

全6巻 セット定価 本体 14,100円+税  
各定価 12場面 本体 2,300円+税  
16場面 本体 2,600円+税

子どもの頃のかくれんぼの話などになると、「オニはごうやってきめたの?」となり、その地方のジャンケンの話になり、ひとしきりその地方独特のジャンケンに興じる、といった具合です。まさに、松谷さん自身が子どもになってのひとこまです。語り手が子守りをした話なども、身乗り出して聞き入ります。

「赤ちゃん、おんぶしてオムツがぬれると、どうするの?」

松谷さんのこうした問いかけに助けられて、語り手の想いは過去へとさかのぼり、やがて昔話の世界に入っていきます。語り手と聴き手の松谷さんとの共同作業で、血のかよった民話が紡ぎ出されていくわけです。「むかし、あるところにおじいさんとおばあさんが……」で始まる

る話も、「ジャンケンの唄」も「子守りの思い出」も、「戦死した夫の帰りを空しく待った」という残酷な記憶も、すべてが松谷さんにとっては、後世に伝えなくてはならない民話なのでした。

### 紙芝居大好き

松谷さんは、紙芝居が大好きでした。

庭に小さな文庫を建てて「本と人形の家」と呼びました。子どもが手に取りやすいように、壁際にビッシリ並んだ紙芝居は、古いから新しいのまで見事なものでした。毎週土曜日が文庫の日で、二時を待って紙芝居が始まります。演じるのは、いつのころからか僕の役目となっていました。ご本人もやってきて、いつものころに腰をかけます。そして、こんなやりとりがあったりします。

「章ちゃん、今日は何をやるの?」

「天人のよめさま」

「あら、わたしの(脚本)だ。わたし、それ、好きなの」

終わると、拍手をして、

「ああ、おもしろかった」

そうです。誰の作品でも好きなものは好き。はつきりしています。幼稚園にげん、松谷さんとしては当然のことながら、それが自分の作品でも声をあげて笑

い、泣くところでは泣く(紙芝居ではあまり泣くところはありませんが)。わざとではない天衣無縫なその反応が演じ手にはありがたいのです。演じ手がまずい時は、許しません。しつかりダメを出します。「あそこは、もっと間をおいたほうがいいんじゃないかしら」

民話を聴き取る名手だった松谷さんは、

語りの名手、再話の名手でもありました。文字で民話を語ることを、再話といっています。口伝えの語りではありません。

文字で伝える語りです。口伝えの語りでも、再話でも、なくてはならないのが相槌です。語っている途中、きまったところで、きまった相槌を要求する土地の語り部もいるくらいです。声を出しても出さなくても、ただうなずくだけでも、相槌は、それによって間が生まれ、語り手と聴き手との交流も生まれるのです。肝心なところに、間がある、語りにリズムのようなものが生まれます。その

間が、語りの名手松谷さんの民話紙芝居の文体の中には隠されているのです。その間を発見してお客さんの前で活かしてください。演じているあなたは、

それを書いた松谷さんとともに、お客さんとの対話、交流を楽しむことになるでしょう。お客さんの声のない相槌を聴きながら。

### 選ばれた民話たち

さて、民話はいくつかのジャンルに分けて考えることができます。例えば、本格民話、動物民話、笑い話、現代の民話など、『天人のよめさま』と『まえがみたらう』は、いわゆる本格民話です。本格民話は、おもに人間の世界の物語で、主人公の不思議な誕生から成長へ、人間のあるべき姿を語ります。『天人のよめさま』では、背景となる楽の音や、けし畑を吹く風のようにするなど、松谷さんの真骨頂、美しく歌うような言葉の流れで、物語に奥行きをもたせます。一般に、情景描写は、民話の語りにはそぐわないとされますが、ここでは、生きています。優しさがテーマです。楽しんでたっぴり語りたいところです。

対照的に『まえがみたらう』は、全体に勢いがあります。弾んでいきます。ここでは、言葉による情景描写はほとんど必要なさそうです。台詞のリズミカルなやりとりが芝居の本来のすがたです。自分で台詞を声に出しながら、えんぴつを握る作家の姿が眼に見えます。テレビ台本や人形劇の脚本をたくさん書いた松谷さんは、劇作家でもありました。前後編、二十四場面の長編ですが、長さを感じさせないドラマです。紙芝居は本来芝居で

す(絵本などの読み聞かせとは違います)。このことが、ときとして、忘れられていくことがあります。

『やまんばのにしき』は、笑い話の要素もありますが、これも本格民話といっていると思います。やまんば」とあかざばんば」というすばらしく個性的なふたりの女性の物語といってもいいでしょう。異界のひと、現世のひと、この鮮やかな対照は、松谷さん自身の二面性を、いや、人間のあり方の二面性そのものを描くようです。何回も声に出して読んで大切な「間」を発見してみてください。もちろん、間を置かずに畳みかけなくてはならないところもあるわけですが。

『さるとかに』は、あまりにもポピュラーな動物民話です。ストーリーはご存じのとおりを展開です。特徴的なのは、自由闊達な語りの雰囲気がいきていることです。土地の語り手と膝をまじえて、その語りに耳を傾け、心から楽しんだ体験をもとに、作家自らも語っているのです。そして同じく、動物民話ではありますが、たぬきときつねの『はけくらべ』は、笑い話でもあります。今か今かと、笑いを待っている観客と、ニヤニヤしながら書いていたかもしれない作者と、そしてあなたも一緒になって、笑い話には特に有効な「間」を楽しんで演じてください。

# 紙芝居の灯をつなぐ

・・・フランス・スペインでの広がり・・・

築野友衣子



パンプローナの会場で、集まった子どもたちや先生方と

六月二十一日、フランス・パリの日本文化会館で、童心社会長・紙芝居文化の会代表の酒井京子さんが、紙芝居について講演されました。

紙芝居がフランスに本格的に伝わってから約十五年。紙芝居の人氣はどんどん高まっているのですが、「木枠に絵を入れ、隣で役者がお話をすれば紙芝居」という考えの人や、絵本をそのまま拡大コピーして紙芝居として使う人もいます。私は現在、子ども時代を過ごしたフランスに暮らし、絵や紙芝居を制作していますが、「紙芝居について知りたいが、きちんと学べる場所がないので、手探りでやるしかない」という嘆きを多く聞いてきました。そこで何度も酒井さんにお願ひし、来ていただけることになったのです。

会場には図書館の司書や学校の先生方、また読み聞かせ団体の方などが七十名ほど集まり、熱心に聴かれました。フランス民話をもとにした『あひるのおうさま』は、お金を返してくれない王様に抗議するあひるを、キツネや川八チが助け、最後にはあひるが王様になるというお話。「権力の横暴に立ち向かう民衆という構図に注目しがちだけれど、物語の本質は、正しい信念で行動を起こした人には、見返りがなくとも共感して付いてきてくれる人がいるということ。個人が自律的な国ならではの民話ですね」という言葉には、多くの人が感心して頷いていました。単なる娯楽にとどまらず、生きる

上で大切なことを子どもたちに伝えてくれるのが紙芝居です。シンプルだからこそ奥が深い紙芝居の魅力が、この話を通してフランスの人たちにも理解されたようでした。

「色々な形の舞台を作っても良いのか」という質問もありました。日曜大工の盛んなフランスでは手作り舞台が一般的で、個性を出すために華やかな色や形のものも多いのです。「お話によって合わないものが出てしまうのではないかしら」というお返事に納得されたようです。

その後酒井さんとスペインのパンプローナに向かいました。当地では、学校の先生方や図書館の熱心な活動によって、紙芝居がきちんと伝えられていました。会場では子ども達の創作紙芝居の上演や、保護者や先生方との交流会がありました。紙芝居を授業に取り入れた際の報告もありました。どの人も熱意に溢れ、今後の活動への大きな励みになると感動されていました。

二つの国で紙芝居の受け入れられ方は違っても、出会った人たちがみんな紙芝居が大好きだということは同じでした。紙芝居の道をますます進んでいきたい私にとっても、この経験は、まるで燃えたがっているロウソクに火を灯していただいたようでした。これからもこの灯りを絶やさないように、そして別のロウソクにも光をつないでいけるように、地道に活動していきたいと思えます。

(つ)の ゆいこイラストレーター

「くろくん」シリーズ

八年ぶりの新刊となる

『くろくんとちいさいしろくん』。

なかやみわさんに、

刊行までのことや

これからのお気持ちを

うかがいました。



『くろくんとちいさいしろくん』

なかやみわ/さく・え  
本体価格1200円+税



## なかやみわさんインタビュー

●新刊はどのようにして生まれたのでしょうか？

くろくんのシリーズにいたたく感想の中に「なぜ白が無いんですか」という声が多くはないけれど、途切れることなくありました。実際のクレヨンには白は必ず入っているのですが、一作目の『くれよんのくろくん』の話には白が登場する場面がありません。だからクレヨンも切りよく白なしの十色セットでいこうと最初に決めてしまったのですが、ずっと頭の片隅では白の存在を気にしていました。

白いクレヨンで絵を描けるのはどんな場面か、いろいろ考えました。クレヨンって油分を含んでいるから水をはじくんです。だから白のクレヨンで描いた上に水彩で他の色をのせると、はじいて白の線が浮かびあがります。白を使うならそれかなと思ってはいましたが、それだけじゃお話にならない。そういう絵を作り上げるお話を、くろくんの世界観のなかでどう構築するかが難しくて悩みました。

私、変にとらわれていたんですね。くろくんたち以外のクレヨンのセットっていうのを思いつかなくて。でも、小さいクレヨンもかわいいかもと思い、並べてみたら、くろくんたちがお兄さんに見えたんです。年長さんと年少さんというイメージがわいて、そこからはあっというまにお話できました。

子どもを保育園に預けて仕事をしていた頃、お迎えに行くと、三歳の男の子が二歳の子に得意げに遊びを教えるあげたり、おしゃまな女の子が一歳くらいの子に靴下をはか

せてあげたり、子どもが子どもの面倒をみてるんです。やっぱり、人は生き物として小さなものを守る気質があるんだなと感じて、それを新作に入れたかったんです。

結果的に八年という時間はかかってしまいましたが、むしろなく自分の形にまとめられてよかったです。

●白は使い方が難しい色ですね。

白って、消すこともできる色ですよ。昔、絵の勉強をしている頃に、先生から「消しゴムは消す道具じゃないんだぞ」と言われたんです。光を差し込んだり、輪郭をぼかして空気を感させたり、描くための道具だから、うまく使えて。間違えた線を消すものだと思っていたので感動しました。立体感を出したり、白は描く上では必要不可欠なんですけど、口頃は意識していなくて、でもみんな自然に白を感じ取って形にしていると思うんです。

●今年はデビュー二十年目ですね。

私は、子どものために描きたい、子どもがおもしろいと言ってくれるものだけを作りたいという一心でやってきました。絵本には絵の素晴らしさだけでなく、生きるためのヒントがたくさんあるんです。物語を通じて主人公と同じ体験をすることによって、友だちとの微妙な気持ちのやりとりや、うまく言葉にできなくて手を出してしまった時にどうしたらいいのかなど、悲しみや喜び、人の痛みを学ぶことができます。それは物語絵本でしかできないと思いますし、子どもはそれを求めています。私は絵本を描く以上は、お話で子どもの心をつかむことをおろそかにせず、追求していきたいと思っています。

(文責・編集部)

# 9月の新刊図書!

いきもの みつけた (全4巻)

**いきもの かくれんぼ**  
**かくれて ぱくり**  
**いきもの ちえくらべ**

嶋田泰子/文  
 海野和男・中村庸夫/写真  
 本体価格1900円+税

**いのちは めぐる**

嶋田泰子/文  
 佐藤真紀子/絵  
 本体価格1600円+税



いきものの擬態をテーマにした新シリーズ。「食べるため」「食べられない」ために、いきものたちは必死に知恵比べし、かくれんぼの達人になってきました。虫に魚、鳥や哺乳類まで、食物連鎖の全体像を描き、いのちのつながりを伝えます。

## 読者の声

単行本絵本  
**わたり鳥**  
 鈴木まもる/作・絵  
 本体価格1500円+税



自分の住みやすい場所を求めてたくましく飛ぶわたり鳥。迫力のある見開きの飛ぶ絵に引きつけられました。自分(人間)ももっと外の世界へ、視野を広げたい……。すてきな本の出会いです。(埼玉県 S・A)

とことこえほん  
**どーこだ どこだ**  
 カスコ G・ストーン/さく  
 本体価格800円+税



一歳二か月の娘に母(おばあちゃん)が贈ってくれました。最近急に絵本に興味を持つようになり、たのしく読みかかせています。言葉も出てきておしゃべりも上手になってきました。『どーこだ どこだ』はかわいいヒヨコをゆびでなぞって、あそんでいます。(東京都 E・S 三三歳)

お便り、お待ち、しています。

「母のひろば」へのご意見・感想のほか、子育てについて日々思うこと、子どもたちの活動などについて、お便りをお寄せください。送り先は下記、童心の会宛でお願いいたします。



\*お便りを誌面で紹介させていただくことがあります。その際には編集部で選んだ絵本を一冊差し上げます。

2017年9月15日発行 (毎月刊)  
**母のひろば** 第640号  
 定価50円(年600円/送料とも)  
 発行所: 童心の会  
 〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6  
 株式会社童心社内  
 電話03(5976)4402  
 編集発行人: 大熊裕  
 童心社のホームページ:  
<https://www.doshinsha.co.jp/>  
 フォーマットデザイン: bise inc.

**定期購読のご案内**  
 おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。  
 見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。



## あとがき

●松谷先生の紙芝居作品を読み返し、改めて語りの力に魅了されました。動物もスプーンや牛乳瓶まで幼児の世界で躍動する「モモちゃん」。神人も動物も渾然一体となって骨太な物語を紡ぎ、また民衆のおおらかな笑いが弾ける民話。新たな絵も素晴らしい「松谷みよ子かみしばい 民話傑作選」「松谷みよ子 モモちゃんの おはなし」、どうぞご覧ください。◎

●小さな体に四季をつめ込んで、子どもは少しずつ大きくなっていくようです。梅雨と夏が入れ替わったような今年の東京。この数年似たり寄ったりな気もします。私の思う夏と子どもの思う夏は違ってくるのかしら、と不安に思う親を尻目に、元気に水たまりを撥ね上げる我が子。これから私の知らない彼女の秋を、たくさん集めてくれるでしょう。▲